『泥酔した都』作・玉井秀和

1

とある田舎。
母親と男兄弟が家事をしている。兄貴がコーン・カーンと何かを作っている。セーターの毛玉をとっている母。
ひとりの少女・つばめが飛び込んでくる。

つばめ「大変大変大変なの！」
母「ぎゃーどうしたの。水戸黄門がついに印籠を出さなかったのかい？」
つばめ「違うの違うの。なにか声が聞こえたの」
母「声が聞こえたってそりゃ聞こえるだろう。ほらだってつばめには耳がついているんだからね。それともあれかい。今まで耳垢がつきすぎて聞こえなかったのかい？」
つばめ「そうじゃないのよお母さん。鐘が鳴ったとき天から声が聞こえてきたの」
母「あぁらやだ。ついに狂っちゃったかしらね。お兄ちゃんお兄ちゃん。つばめが天から声が聞こえてきたってさぁ」
兄1「天から声が聞こえるわけがないだろう。天ぷらからは「カラカラ」って声が聞こえるかもしれないけど」
つばめ「天ぷらからは「カラカラ」なんて声は聞こえないわよ」
母「お兄ちゃんはそういうことを言っているんじゃないんですよ」
つばめ「じゃあ何が言いたかったのよ」
母「何が言いたかったの」
兄1「何が言いたかったの」
兄2「俺に聞くな！」
つばめ「っていうかさっきからコーン。カーンってうるさいのよ。お兄ちゃん」
兄2「しょうがないだろう。のっぱらでアホみたいにほうけているお前と違ってお兄ちゃんは仕事をしてるんだから」
つばめ「私が大事なことを喋ってるのに、コーン。カーン。なんて間違ってるわ」
兄2「間違っているのは俺のコーン。カーン。じゃない。お前の話の根幹が間違ってるんだ」
母「あらお上手！」
つばめ「私の話のどこが間違ってるって言うのよ」
兄2「天から声なんて聞こえてこないんだよ。天ぷらそばを天ぷら抜きで注文したら、それはもうそばなのと同じようにな」
兄1「そうだ、それはもうそばだ！」
母「じゃあ、天ぷらうどんから天ぷらを抜いたらうどんなのね」
兄2「そうだよ母さん。それはうどんだ！」
兄1「いや待て兄さん。うどんはうどんでも、讃岐うどんかもしれないし稲庭うどんかも知れない。どちらもうどんと名前はつけど、似ても似つかぬ食べ物だ」
兄2「そうか、弟よ。しかし天ぷらに合うのはさぬきうどんじゃぁないのか？」
母「あたしゃ讃岐うどんは嫌いですよ。もうコシが強すぎて」
ざわざわ。
つばめ「やめてやめてやめてやめて！　私はお蕎麦やおうどんの話をしたいんじゃないのよ！　天から声が聞こえてきたの」
母「だから。天から声なんか聞こえないって言ってるんだろう」
つばめ「でも聞こえたのよ。桜の花びらにのって」
母「お釈迦様の声でも聞こえたのかい」
つばめ「そうよ。お釈迦様は都に行って書家になれっていったわ」
母「釈迦が書家になれって言ったのかい！」
つばめ「そうよ。初夏が来たら都に出て、書家になって帝を救うようにって」
母「随分洒落の聞いたお釈迦様だね」
兄1「そいつの頭はもうお釈迦だな」
つばめ「どうして母さんも、兄さんも信じてくれないの。本当のことなのに」
母「信じてやりたいけど、そんな話信じるほうが無理ってもんだよ。つばめ」
兄2「第一、つばめ。お前、字なんて書けるのかい」
つばめ「えぇ、書けるわよ。ほら！」
つばめ、書いてみせる。
驚く一同。
母「お兄ちゃん」
兄2「なんだい母さん」
母「初夏ってのはいつからだい」
兄2「暦上はもう初夏だ」
母「今すぐ都に向かう準備をするよ」
兄1・2「おう」
皆、準備をしだす。
突っ立っているつばめ。
母「つばめ。これを持っていくんだよ」
つばめ「なぁにこれ？」
母「覚えてないのかい。昔あんたが変なおじさんからもらってきた宝石だよ」
つばめ「変なおじさんじゃなくて優しいおじさまよ」
母「女の子にやさしくするやつは大体変な奴だよ」
つばめ「これを持っていたらまたあのおじ様に会えるかしら」
母「お金に困ったらきっとこの宝石が助けてくれるからね。それがわかったら、さっさと支度しな！」
つばめ「支度するってどこに行くの？」
母「決まってるだろ！　都に、行くんだよ！」

オープニング

2

とある都。帝。臣下。二人共、鶏小屋を覗いている。
帝「お、いくか」
ハチ「あぁダメです」
間

ハチ「あ、帝、帝、帝、帝！」
帝「え、え、え。あ、あ、あ」
ハチ・帝「あぁぁぁぁ」
帝「え、あ、ハチハチ、ほら、あ、今度こそ！」
ハチ「あ、あ、あ、あ」
ハチ・帝「あぁぁぁぁ」
帝「だめだぁ」
ハチ「ダメですね」
帝「どうして卵を産まないんだ、トリの野郎」
ハチ「もうこれで１０日目です」
帝「毎日の目玉焼きを楽しみに朝起きていたのに、これじゃあ朝起きる意味がない」
ハチ「起きる意味はなくても目覚めてしまう」
帝「これが早起き体質の定めか！」
ハチ「６時半には寝て４時には起きる」
帝「一番鶏よりも早く目覚めてしまうから、やることがなさすぎて天井のシミを迷路に見立てて時間を潰しているのだ」
ハチ「寝ればいいのに」
帝「そんな私が楽しみにしていた卵焼きが食べれないだなんて」
ハチ「こればかりは神様のなさることですから」
帝「罰当たりめ。神様のせいにするな」
ハチ「じゃあどうしろっていうんですか。私に卵を産めとおっしゃるのですか」
帝「なんだ、ハチにも洒落が言えるのか」
ハチ「いえ、そういうわけでは」
帝「臣下の分際で偉そうに。洒落を言っている暇があったら卵をもってこい」
ハチ「そう言われましてもないのでございます」
帝「どうして卵を産まんのだ。あのトリは卵を産ますことにかけては天下一だったのに。１０日まえからハタと産まなくなった」
ハチ「畑の作物は食えるのに卵が食えない」
帝「ハタハタはあるのに卵がない。それにお前、今朝は牛乳もなかったぞ」
ハチ「そうなのです。牛の方も全然牛乳を出しやがらんのです」
帝「どうなっちまってるんだ。イライラする」
ハチ「カルシウム不足です」

そこに、ばあや、入ってくる。

ばあや「ぼっちゃま。ぼっちゃま。ぼっちゃま。ぼっちゃま。どこでございますかぼっちゃま！」
帝「ばあや。ここだここ。ここだ。おい、ばあや。ばあや？　ばあや」
ばあや「冗談でございますよ。ぼっちゃま。冗談。ジョーク。ジョーク」
帝「ばあやも洒落か。すまんがばあや、洒落に付き合っている暇はないのだ」
ばあや「どうしたのでございますか」
帝「トリの野郎が卵を産まんのだ」
ばあや「ははははは」
帝「何がおかしいのだ」
ばあや「野郎のトリは卵を産みませんよ。卵を産むのはメンドリだけです」
帝「メンドリが産まんのだ。それもこれで１０日だ」
ばあや「１０日！　ちょうどあの少女が来てからでございますね」
帝「少女？　なんだ少女って」
ばあや「１０日前に帝に会いたいっていう、なんか気の触れた田舎ー臭い、泥臭ーい、犬臭ーいオナゴのことでございますよ」
帝「そんなヤツもおったな」
ばあや「まだ、会いたいと」
帝「なんだ。また来よったのか」
ばあや「いえ、もう１０日も門の前で」
帝「帰っとらんのか！」
ばあや「そうなのです」
ハチ「帝。一度あってみてはいかがでしょうか」
帝「なぜわしが何処の馬の骨ともワカラン少女にあわねばならんのだ」
ハチ「あったらわかるのです」
帝「だから何故あわねばならんのだ！」
ハチ「彼女には神の声がきこえるのだそう」
帝「ふー。お前本気で、神の声が聞こえると思っているのか。声が聞こえないから神様なんじゃないか」
ハチ「我々には聞こえない神の声を紙に書きおこしてくれるのです」
ばあや「なんと」
帝「そんなの僕にだって出来るさ。ほら、書くよ。ほれほれ」
ハチ「違うのです帝。彼女の文字は実現するのです」
ばあや「そんな馬鹿な」
帝「そうだ、そんな馬鹿なことがあるわけ、そうなのか」
ハチ「そうなのです」
帝「なんでもか？」
ハチ「なんでもです」
ばあや「ぼっちゃま邪な考えはいけません」
帝「ばあやは黙っとれ。なんでもと言ったな」
ハチ「なんでもです」
帝「ほんとにほんとになんでもなんだな」
ハチ「なんでもです」
ばあや「ぼっちゃま」
帝「では、このメンドリに卵を産ませることもできるのだな」
ハチ「えぇ、できますとも」
ばあや「ぼっちゃま！」
帝「ばあやは黙っておれ！　会うぞ！　その女を客間へ連れてこい！」

転換

３

客間。
クロウト、ものすごく椅子の匂いを嗅いでいる。
クロウト「これが帝の椅子かぁ。わぁ、ふかふかだぁ。ふかふかなんだぁ。なんだお前頭が高いぞ。おおぉぉお。これが帝かぁ」

とかとか

帝たち、入ってくる。

クロウト「帝。椅子です」
帝「あぁ、叔父さん。ありがとう」
クロウト「どうして、あんなオナゴに会うのです」※オナゴで言葉遊びできそう。
帝「それがなクロウト。ハチが言うには、そのオナゴが紙に書いたことはなんでも実現するようなのだ」
クロウト「どういうことですか」
帝「神の声が聴こえるというのだ」
クロウト「本当なのかハチ」
ハチ「クロウト様。どうやらその様なのでございます」
クロウト「なんということだ」
ばあや「ハチ。静かにさせなさい」
ハチ「はい、ばあ様。静かに！　注目！」

一同、臣下を見て、またざわざわし出す。

臣下「ちがーう！　帝に注目するのだ」
１「なによ臣下の分際で偉そうに」
２「あれじゃ臣下臣下言ってるけど、頭は退化しちゃってるわよ」
１「人間の成れの果てね」
帝「喋るけどいい？」
１「なによ帝の分際で偉そうに」
２「あれじゃあ帝は帝でも、ミかドの音しか出ないクラリネットね」
１「クラリネットなんて高級なもんじゃないわよ。リコーダーよリコーダー」
帝「じゃあいい、じゃあいい。喋らない喋らない」

ざわざわ。

ばあや「うるさーい。うるさいうるさいうるさいうるさい！　純粋にうるさーい！　耳キーンってなっちゃった。わかる耳キーンってなるやつ。あなたなったことある？」
１「そりゃありますよ、夏にかき氷食べた時とか」

ばあや、１をビンタする。

ばあや「それは頭キーン！　キーンはキーンでもキーン違い！　あなたは！」
２「ありますよ。机の角に肘ぶつけた時とか」

ばあや、２をビンタする。

ばあや「それは肘ビーン！　角にぶつけて肘ビーンってする奴！　あたしゃキーンの話をしてるんですよ！　お前は！」
ハチ「もちろんありますよ！　何を言ってるんだ君たちは！　こう座ってね、ここを叩くとね、膝がまるで自分のものじゃないかのように勝手にね（途中で遮る）」

ばあや、ハチをビンタする。

ばあや「それは膝ビーン！　もういい！　ぼっちゃまがお話になるんだから聞きなさい！　全く、馬鹿ばっかりなんだから。さぁ、どうぞ」
帝「あ、ごめん聞いてなかった」
ばあや「いやぁぁぁぁ」
帝「ばあや」
ばあや「やあぁぁぁぁぁ」
ハチ「落ち着いてください。ばあ様！」
ばあや「やあぁぁぁぁ」
クロウト「落ち着いてください。奥様！」
ばあや「奥様？」
クロウト「え、奥様」
ばあや「あらやだ、奥様感出しちゃった？　あらやだ。未亡人感？　でちゃった？　あらやだ」
ハチ「帝、大変です。奥様が急に未亡人感を！」
帝「もうなんでもよい！」

ざわざわとなる。

4

コウシャクが立っている。
静まり返る皆。

帝「女って言ってなかったか？」
ハチ「えぇ、女のはずです」
帝「女なのだよな」
クロウト「女に間違いありません」
帝「そうか。おい、そこの女。お前か、神の声が聞こえるというのは」

間

ハチ「おい、女。お前のことだ」

間

ばあや「女。あなたのことですよ」
コウシャク「私は、男ですが」
帝「やっぱり男じゃないか！」
ハチ「いや、だって女だって」
ばあや「えぇ、女のはずなんですけどねぇ」
帝「本当に本当に女なんだな」
ハチ「えぇ」
クロウト「えぇ。どこからどう見ても女です」
帝「おい。お前やっぱり女だろ」
コウシャク「どこからどう見ても男ですが」

ハチ「どこからどう見ても男にしか見えません」
帝「私にも男にしか見えない」
ばあや「屈折です。屈折のせいで男に見えるのです」
クロウト「そうだ、屈折だ」
帝「屈折？」
ばあや「ええ」
クロウト「間違いありません」
帝「そうか屈折だったのか」
コウシャク「えっと、あの、神の声とはなんですか？」
ハチ「お前だろ。門の前で１０日も待っていたというのは」
帝「そうだそうだ。こっちは卵不足で困ってるんだ」
コウシャク「なんのことでしょう」
ばあや「とぼけたって無駄ですよ。ほら、紙に神の言葉を書きなさい」
白痴「えぇ？」
ハチ「ほら、早く」
皆「早く」

コウシャク、書く。絶妙な出来栄え。

帝「お、おぉ。なんとも言えぬ出来栄えだな」
ハチ「あまりにも普通です。普通具合が神です」
帝「確かに神だ。これは神の筆だ！」
ばあや「えぇ、ぼっちゃま。間違いありません。神の筆です」
クロウト「素晴らしい（拍手）」

盛り上がる。

コウシャク「先程から皆さんが何をおっしゃっているのか分かりませんが、私はつい先ほど都に戻ってきばかりであります。しかし、泊めてくれる知り合いもいないため、遠い親戚である帝様とお近づきになれればと思い、ここに参った次第であります」
ハチ「ん？　じゃあお前は今ここに来たのか？」
コウシャク「そうです」
ばあや「じゃあ神の声が聞こえるわけでは」
コウシャク「ないですね」
帝・ハチ・ばあや「なんだ、そうなのか」
帝「それならそれと早く言ってくれればいいのに。気を使って神の筆だ、なんて言っちゃったじゃないか」
コウシャク「すみません。皆さんが集団圧力をかけてくるものですから」
帝「なんかごめん」
コウシャク「それで、あの帝様にお会いしたいのですが、どちらに」
クロウト「先程から喋ってるではないか」
コウシャク「あ、ではあなたが」
クロウト「え。あ。いかにも」
コウシャク「あ」
皆「え」
帝「ぼくぼく」
クロウト「あ、失礼。私ではない。この方だ」
帝「びっくりしたぁ」
コウシャク「すみません失礼いたしました。椅子に座っていたものですから」
帝「これは帝の座る椅子だ」
コウシャク「では、その椅子に座ったものが帝なのですね」
帝「ん？　帝だからこの椅子に座るのだ」
コウシャク「ちょっと何言ってるか良く分かりませんが、あなたが帝様なのですね」
帝「そうだお前、名前は」
コウシャク「コウシャクです」
帝「コウシャク。泊まる家がないんだったな」
コウシャク「はい」
帝「ハチ。家に泊めてやれ」
ハチ「なんでですか」
帝「かまわんだろう」
ハチ「構いますよ」
コウシャク「よいのですか？」
ハチ「よくない」
帝「よい」
ハチ「よくない、あ、です」
帝「よいな」
ハチ「帝ぉ」
クロウト「帝。例の少女です」
帝「お、本物だ」
ばあや「ささ、ぼっちゃま身だしなみを整えて」
帝「いや、ばあや。面白いことを考えた」
ばあや「面白いこと」
帝「コウシャクに座ってもらおう」
コウシャク「え？」
ばあや「おふざけはやめてください」
帝「本当にその少女が神の声を聴こえるのであれば、迷わず私のところに来るであろう」
ハチ「なるほど！　それは面白い」
ばあや「ハチ！」
ハチ「ダメですぞ帝」
帝「いいではないか」
ばあや「ぼっちゃま」
クロウト「ばあ様。面白い考えかもしれません。帝、私が代わりに座っても良いですぞ」
帝「コウシャクの方が面白いだろう」
クロウト「はい」
帝「よいかコウシャク」
コウシャク「騙すようでなんだか気乗りしませんが」
クロウト「では、私が」
帝「騙すわけではない。真実かどうかを見極めるためだ。ささっ。もう来てしまう」
クロウト「あ」
コウシャク「はぁ」

コウシャク、椅子に座る。座り慣れない様子。
（①は同時に進む）
①

コウシャク「ふかふかだぁ」
クロウト「ど、どんな感じだ」
コウシャク「なんだか、腰を痛めそうで、あまり座り心地がいいとは」
クロウト「そんなことないだろう。気持ちいいだろう」
コウシャク「いえ、どうでしょう」
クロウト「えだって。あ、ふわふわだ。あ。あ」

①
ハチ「なんか、我々もドキドキしてきますね」
ばあや「普通に普通に」
帝「ばあや、普通にだ、普通に。それは普通ではない」
ばあや「普通にしようとすればするほど、普通がわからなくなっていく」
ハチ「普通がこんなにむつかしいとは」

ざわざわ

5

扉があく。つばめが入ってくる。
つばめを見たとたん、ものすごい反応を見せるコウシャク。
見つめ合うコウシャクとつばめ。

間（ゴクリ）

つばめ、コウシャクのもとへ歩いていき、手を取り跪く。

コウシャク「どうして」
つばめ「え？」
コウシャク「あ。え、帝、帝、どうすれば」
帝「頑張れコウシャク。頑張れ、コウシャク」

つばめが帝の方を向くと、しれっとする。

コウシャク「そ、そちのもの。よくぞここに来たてまつったもう」
つばめ「帝様のためとあればどこへでも参りますわ」
コウシャク「そちの。そなた様のお名前はなんでござる？」
ハチ「ござる」
帝「僕ってあんななのか？」
ハチ「いえ」
つばめ「つばめと申します」
コウシャク「ゴホン。つばめ。おそちか、紙に神のお言葉をお書きになれ申すといいたてまつるのは」
つばめ「はい。天の声が桜の花びらになって降ってくるのです」
ハチ「帝、本当にあの少女が例の少女なのでしょうか」
ばあや「一向に気がつきませんね」
帝「なんか悲しくなってきた」
つばめ「帝様。私は天から帝様に会うようにと言われました」

コウシャク「そうでおじゃるか。朕の。朕のことをお手伝い申し上げざるを得ずか」
つばめ「ええ、もちろん」

つばめ、笑う。
つられて、コウシャクも笑う。

つばめ「だめね」
コウシャク「ええ」
つばめ「さぁ、おじ様。そこはおじ様が座る椅子ではないわ」
コウシャク「全く。その通りです。ふかふか過ぎて腰が持ちません。私はコウシャクといいます」
つばめ「コウシャクさん。下手な芝居に付き合ってくれてありがとう」
コウシャク「騙すような真似をして申し訳ありません」
つばめ「帝様に言われたんでしょ」
コウシャク「ええ」
つばめ「帝様。からかうようなことをして申し訳ありません」
帝「気が付いておったのか」
つばめ「もちろんですとも」
帝「どうして私が帝だとわかったのだ」
つばめ「どうしてって、神様がおっしゃったの」
帝「つばめ。お前の書いた文字はなんでも実現するらしいな」
つばめ「そうじゃないのよ、帝様。私は神様の声を紙に書き起こすだけ。私がただ、文字を書いたって実現しないわ」
帝「じゃあ何が実現するんだ？」
つばめ「天の声は、桜の花びらに乗って降ってくるの」
帝「桜の花びら」
つばめ「ええ」

つばめ、文字を書く。「勝」という字。

帝「勝っ？」

知らせが届く。

クロウト「帝。南の戦場から勝利の報告が」
帝「なんだと！」
ハチ「南はもうどうにもならんと今朝報告があったばかりだ」
ばあや「なんてこと」
ハチ「奇跡だ」
クロウト「こんなことがあっていいのか」

つばめ、書く。「卵」という字。

帝「卵だ」
ハチ「ということは」

知らせが届く。

クロウト「帝！　鶏が卵を産んだようです！」
帝「なんと！」
ハチ「１０日も生んでいなかったのに！」
ばあや「あわわわわ」
帝「卵だ！　卵だ！」
ハチ「卵です！　帝！」
クロウト「奇跡だ」
帝「やったぁ！　本物だ。つばめ、君は本物だ」
つばめ「お申し付けがあればなんなりと」
帝「私の力になってくれるのか？」
つばめ「もちろんですとも！」
帝「宴じゃ！　今日は宴じゃ！」

転換。

6

酔っ払っているハチ。

コウシャク「ハチさん」
ハチ「はーい」
コウシャク「おうちはどっちですか？」
ハチ「はーい！」
コウシャク「おうちはどっちですか？」
ハチ「まっすぐ行ってバックだ」
コウシャク「まっすぐ行って、バックですね。社交ダンスか！」
ハチ「えぇ？」
コウシャク「え、じゃなくて？　家はどこにあるんですか」
ハチ「コウシャクさん」
コウシャク「はい。なんでしょう」
ハチ「家ってのは、ここにあるのさ（自分の胸を叩いて）」
コウシャク「あ、そうだったのか。ではちょっと失礼して」
ハチ「あ、おかえりコウシャクさん」
コウシャク「ただいまですー」
ハチ「ご飯は食べた？」
コウシャク「えぇ、頂いてきました」
ハチ「せっかく作ったのに」
コウシャク「なんなんですか！　ちょっと家はどこにあるんですか！」
ハチ「コウシャクさん」
コウシャク「なんですか？」
ハチ「家はどこどこって、もう俺たちは家に着いてるんじゃあないのか？」
コウシャク「いいえ？」
ハチ「ほれ、みたことか」
コウシャク「え？」
ハチ「いーえ（笑う）。そうだコウシャクさん。あんたはもうすでに家についている！」
コウシャク「ついてませんよ！　今日あった人にこんなことを言うのも何ですけど、ハチさん。人としてしっかりしてください」
ハチ「コウシャクさん！」
コウシャク「なんですか？」
ハチ「あんた、あの娘のことが好きだろう」

間

ハチ「な？　そうだろう」
コウシャク「な、何を言ってるんですか、ハチさん。ほら、家はどこなんですか？」
ハチ「なんで隠すんでい。隠すようなことじゃあねえだろう」
コウシャク「酔っ払ってるんですよ。だから、そんな質問をする」
ハチ「そうだよ？　酔っ払ってるよ？　酔っ払ってないと「おかえりー」なんてやらないよ？　ゲロは出そうと思ってなくても出るけど（吐く）、けど！　思ってもないことは口からは出てこねえだろ？」
コウシャク「ほらほら、ちゃんと自分の足で歩いてくださいよ」
ハチ「俺はね、コウシャクさん」
コウシャク「はい、なんですか？」
ハチ「あの子が好きだ」
コウシャク「え？」
ハチ「好きなんだ」
コウシャク「酔っ払ってるんですよ」
ハチ「酔っ払ってもいい。あの子は女神だ。天から声が聞こえる聖女なんだ」
コウシャク「ただの女の子ですよ」
ハチ「いいや、コウシャクさん。あんたも分かってるはずだ。あの子は聖女だ」
コウシャク「聖女だとしても、ただの女の子ですよ」
ハチ「どうも分かってくれねぇな」
コウシャク「すみません。物分りが悪くて」
ハチ「俺はね。この思いを伝えようと思ってる」
コウシャク「つばめさんにですか」
ハチ「そうよ」
コウシャク「伝えてどうするんですか？」
ハチ「伝えて、お嫁にもらう」
コウシャク「ダメです」
ハチ「何がダメなの」
コウシャク「だって、だって」
ハチ「ん？」
コウシャク「だって、、、あなたは酔ってるんですよ。ハチさん」
ハチ「そうよ。酔ってる。酔ってるよコウシャクさん。でも、あんたも酔ってんだろ？」

陽気に歌いながらはけていく、ハチ。
取り残される、コウシャク。

7

朝
いろんな人が入ってくる。

つばめ「おはよう。コウシャクさん」
コウシャク「あ。つばめさん。おはようございます」
つばめ「なに？　寝不足？」
コウシャク「いえいえ、全然元気です！　なんならピカソのフルネームを言いましょうか？　行きますよ。パブロ・ディエゴ・ホセ・フランシスコ・デ・パウラ・ファン・ネポムセーノ・マリア・デ・ロス・レメディオス・クリスピーン・クリスピアーノ・デ・ラ・サンティシマ・トリニダード・ルイス・イ・ピカソ（途中で忘れるので、笑顔で誤魔化す）」
つばめ「言えてないじゃない」
コウシャク「そ、そんなことありませんよ！　じゃ、じゃあ右手は３拍子で左手は４拍子で足を２拍子で動きますよ！　ほら！　ほら！」

頑張るが倒れる、コウシャク。

つばめ「大丈夫！？」
コウシャク「すみません。実は余り寝れませんでした」
つばめ「どうせハチさんが酔っ払ってうるさかったんでしょ」
コウシャク「全くその通りです」
１「つばめちゃん。つばめちゃん。何か文字を書いてくれ」
つばめ「私が書くんじゃないのよ」
１「桜の花びらが舞ってくるんだろ。わかってるよつばめちゃん」
つばめ「本当にわかってるの？」

つばめ、「足」と書く。

１「あ、すごい。すごい膝蓋腱反射する！　すごいする！」
つばめ「行ってらっしゃい！」
２「この前は助かったよつばめちゃん」
つばめ「あら便秘のおばさん」
２「もうね、つばめちゃんが「通」って書いてくれてから快便快便」
つばめ「よかった！」
２「もうね、８０キロも痩せちゃった。何キロ詰まってたんだってね」
つばめ「ちゃんと食物繊維を取るのよ！」
２「はいはーい」
３「つばめちゃん。僕にも書いてくれよ！」
つばめ「あら、坊や。背が高くなったわねぇ」
３「うん！　朝起きたら１２０センチ伸びてた！」
つばめ「成長期ねぇ」
３「昨日までとは見ている景色が大違いだぜ！」

つばめ、「音」とかく。

３「あ、出来る！　ＴＨの発音が出来る！　母ちゃん！　俺にもＴＨが発音できたよ！ありがとうツバメちゃん！」
つばめ「勉強頑張るのよー」
ハチ「おはよう、つばめちゃん」
つばめ「ハチさん。おはようございます」
ハチ「あれ？　髪きった？」
つばめ「切ってないですよ？」
ハチ「そんな気がしてたよ」
つばめ「どうしたんですか」
ハチ「いやいや。おはようコウシャクさん」
コウシャク「おはようございます」
つばめ「コウシャクさん。ハチさんの寝息がうるさくて寝れなかったんだって」
ハチ「そうなのかコウシャクさん」
コウシャク「えぇ、まぁ」
ハチ「いやぁ、すまねえ。飲みすぎちまった。あ、そうだ。偶然指輪を持ってるんだけど、つばめちゃん。いる？」
つばめ「指輪。つけないんですよねー」
ハチ「そうなんだよ。付けないんだよ、指輪。ねー。今晩、ちょっとおしゃれな飲み屋に行こうかなって思ってるんだけど、どう？」
つばめ「今晩ですか？」
ハチ「そうそう。いい感じのとこなのよ。この前見つけてさ」
コウシャク「お仕事ー。お仕事いいんですか？」
つばめ「そうですよー」
ハチ「仕事よりも大切なことってあるだろ？」
つばめ「？？？」
コウシャク「あ、相撲がしたい。なんか急に相撲がしたい！　雲龍型で土俵入りしてからの電車道！　のこったのこった」
ハチ「あちょっと、コウシャクさん！　コウシャクさん！」
つばめ「ハチさん。またねー」
ハチ「あ、つばめちゃーん」

ハチ、コウシャクに電車道されて、ハケル。

つばめ「東〜。コウシャクの山〜」
コウシャク「（心の字を書いて、懸賞を受け取る仕草）」

笑う。

つばめ「ねぇコウシャクさん」
コウシャク「はい」
つばめ「このあと暇？」
コウシャク「えぇ、あとは四股を踏んで下半身を強化するだけです」
つばめ「じゃあ、遊びに行きましょ」
コウシャク「どこにですか？」
つばめ「ひみつ。いい？」
コウシャク「ごっつぁんです」

８

ばあや「ぼっちゃま。ぼっちゃま」
帝「どうした。ばあや。８番茶を飲んだ時のような顔をして」
ばあや「そうなのですよ。もうほっとんどお湯なのですよ。ぼっちゃま。よかったぁ。ぼっちゃま、よかったぁ」

帝「どうした。スイカを切ったら一面種だったのか？」
ばあや「そうなのですよ。もうね真っ黒。黒い白米かと思いましたよ。何ですか黒い白米って！　矛盾よ矛盾！　ぼっちゃま！　違いますよ。悪い夢を見たのでございますよ」
帝「悪い夢？　スリッパを履いたら、そのスリッパが濡れていた夢とかか？」
ばあや「そうなんですよ！　もうね、履いた時にね、ぐちゅって。ぐちゅって。いやぁ！　ぼっちゃま！　さっきからなんなんですか！」
帝「じゃあ、どんな夢なのだ」
ばあや「だから」

間

帝「どうした」
ばあや「なんでしたっけ」
帝「僕には分からん」
ばあや「あぁ、喉のここまで出かかっているのに。あぁ、ムッとする。なんだろうこの酸っぱい気持ち。あぁ酸っぱい酸っぱい。イガイガする」
帝「逆流性食道炎か？」
ばあや「そうなのですよ。最近なんかストレスがかかるとすぐ喉が。ぼっちゃま！」
帝「すまんすまん」
ばあや「違うのですよ、ぼっちゃま。なにかこう、悪いことが」
帝「それじゃわからん、ばあや。ヒント、ヒント」
ばあや「えっと。えっと。あ、月、月、月」
帝「月ってあの天の月か？」
ばあや「えぇ、そうです」
帝「それで？」
ばあや「あ、えっと。あ、あの、あ、えっと、あ、軍、軍、軍がくるのです！」
帝「軍が？　月から？　何を言っているのだばあや」
ばあや「本当なのでございますよ。都は火の海になるのですよ」
帝「本当なのか」
ばあや「本当なのです」
帝「でも、夢だろ」
ばあや「夢です」
帝「夢じゃないか」
ばあや「夢ですけどぉ」

・・・・・・・

コウシャク「ちょっと、つばめさん。何処まで行くんですか？」
つばめ「もう少しよ」
コウシャク「もう少しって、ずっともう少しじゃないですか」
つばめ「そのもう少しを何度も何度も繰り返していけば、どんなところへも行けるわ」
コウシャク「それはもう少しじゃありませんよ」
つばめ「しゃべっている暇があるなら少しでも前に進みなさい」
コウシャク「あ、ちょっと」

・・・・・・・

クロウト、入場。

帝「おお、クロウト。ちょうど良かった」
クロウト「どうしました」
帝「ばあやがな、月から軍が来るというのだ」
クロウト「月から？　どういうことです、ばあ様」
ばあや「夢で見たのですよ」
帝「ただの夢だと言っておるのだが」
クロウト「しかし帝。夢だと言って侮ってはいけません。正夢という言葉もあります。なにかの虫の知らせかもしれません」
帝「でも月からというのはどういうことなのだ」
クロウト「分かりません」
ばあや「あの娘ですよ。あの娘が月から軍を呼ぶのです」
帝「つばめのことか？」
ばあや「あの娘が来てからイヤーな感じがするのです」
帝「なぜ」
ばあや「胸騒ぎがするのです」
帝「考えすぎだばあや」
クロウト「確かに私もそう思うフシがあります」
ばあや「クロウトもそう思いますか」
帝「なぜだクロウト」
クロウト「あの娘は、神に恋をしている」
帝「神に？　恋を？」
クロウト「はい」
帝「それはいけないことなのか？」
クロウト「いえ、いけないことではありません。ただ、危険なことです」
ばあや「ぼっちゃま。なんだか、私はあの娘のことがなんだか気に入りませんよ」
帝「そんなこと、つばめは聖女だぞ」
ばあや「聖女だとしてもですよ」
帝「ばあやは悪夢にうなされただけだ」
ばあや「でも」
クロウト「ではばあ様。こういうのはいかがでしょう」
ばあや「なんでしょうクロウト」
クロウト「私がつばめを監視致します」
ばあや「監視」
帝「クロウト」
クロウト「監視するだけです、帝。しかし、あの少女が何か大変なことをしでかした暁には、このクロウトが責任を持って天の炎で焼き尽くしましょう」
帝「つばめを火炙りにするのか」
クロウト「あの少女が何かをしでかした時には、です。今はか弱き聖なる炎ですが、いつの日に悪の大火になるやもしれません」
帝「だが」
ばあや「任せてよいか？　クロウト」
クロウト「お任せ下さい。ばあ様」

全員ハケル

・・・・・・・

頂上に着く。

コウシャク「あ！　桜の雪が、降ってきましたよ」
つばめ「うわぁ」

間

コウシャク「綺麗ですね」
つばめ「うん」
コウシャク「どうされたんですか？」
つばめ「田舎の景色を思い出してるの」
コウシャク「どんなところだったんですか？　田舎は」
つばめ「なーんにもないのよ。ここよりずーっと空が高くて、どこまでもどこまでも小麦畑が続いてて、春になると畑の真ん中に桜が咲くの」
コウシャク「雄大ですね」
つばめ「そう。でね、その樹の下でね、こうやってぼーっとするの。風が小麦を奏でて、虫が歌って、鳥が指揮をするの。世界は音楽で溢れているんだなって思うわ」
コウシャク「ええ。川が囁き、動物たちが笑い、空が私たちを包み込んでくれます」
つばめ「コウシャクさんも田舎にいたことがあるの？」
コウシャク「ええ。昔に。一度だけ」
つばめ「へぇー意外。ずっと都にいたんだと思ってた」
コウシャク「都に来たのはついこの間です」
つばめ「そうなんだ」
コウシャク「ええ。それで、その桜の花びらに乗って、天から声が聞こえるんですか？」
つばめ「そうよ」
コウシャク「私も聞いてみたいものです」
つばめ「コウシャクさんにも聴こえるわよ。本当はだれでも耳をすませば聴こえるの。聴こうとしてないだけ」
コウシャク「どういう風に聴こうとしたらいいんですか？」
つばめ「あのねー。肘に、キスをしながら今まであった幸せなことを考えるのよ」
コウシャク「肘にキス。こうですか？　あれ？　あ、むつかしいですね」
つばめ「ふふふ。いつかできるようになるわよ」
コウシャク「あ、こうかな？　もうちょっとで出来そうです。あ、出来た！」
つばめ「え、うそ！」
コウシャク「え、なんでそんなに驚くんですか」
つばめ「え、だって人間って肘にキスできないようになってるのよ」
コウシャク「え、じゃあからかったんですか？」
つばめ「愛嬌よ。愛嬌」
コウシャク「愛嬌じゃありませんよ」
つばめ「別にいいでしょ。ほら。コウシャクさん。いくわよ！」
コウシャク「行くって、どこにですか？」
つばめ「降りるのよ！」
コウシャク「降りるって今登ってきたばっかですよ」

転換

１０

クロウト「クロウト。これ以上はだめだ。自我を保てなくなる。やめとくんだクロウト。だめだ、体が勝手に。ああぁぁぁ！　ぬぅん！　あ、あ、あ、あ、あ、あ、ああ！　危ないところだった。危険な椅子だ。危険な椅子だ」

つばめ、扉をたたく。

つばめ「つばめです」
クロウト「入れ」
つばめ「なんでしょう。クロウト様」
クロウト「つばめ」
つばめ「はい」
クロウト「お前の書いた文字は全て正しいそうだな」
つばめ「そうじゃありません。天の声を紙に書いているから正しいのです。正しいのは天です」
クロウト「いいや、違う。お前の書いた文字が正しいのだ」
つばめ「どういうことですか？」
クロウト「人々は目に見えるものしか信じない。お前が紙に文字を書くのであれば、それはお前の文字となる」
つばめ「何が言いたいのです？　クロウト様」
クロウト「いや？」
つばめ「？？？」
クロウト「もし本当に、神の声が聞こえるなら、私に一つ、文字を書いてはくれんか」
つばめ「えぇ、もちろんですとも」

つばめ、書く。途中で自分が書こうとしている文字が「帝」であることに気が付く。

クロウト「どうした」
つばめ「いえ」
クロウト「桜の花びらはなんと言っている」
つばめ「桜の花びらは、あなたが帝になるとおっしゃっているわ」
クロウト「どう言うことだ」
つばめ「それは」

間

クロウト「桜の花びらは意味を教えてはくれなかったのか」
つばめ「、、」
クロウト「では私が教えてやろう。つばめ。私が何故帝になるのか。どうやって帝になるのか。ここに一つ、胃薬がある。これをお前が帝に飲ませるのだ」
つばめ「私が？」
クロウト「そうだ」
つばめ「そんなこと、できません」
クロウト「なぜ」
つばめ「そんなこと間違っています」

クロウト「なぜだ。この字を書いたのはお前だぞ」
つばめ「それは」
クロウト「お前の書いたことは全て真実になる」
つばめ「違います。桜の花びらに乗ってくる声を紙に移しているだけです」
クロウト「だとしたらお前は今、その桜の花びらを疑っている」
つばめ「私が？　桜の花びらを？」
クロウト「そうだ。お前は、天の声を疑っている」
つばめ「、、」
クロウト「つばめ。お前が書いた言葉だ」

クロウト、はけていく。
雷。

１１

コウシャク「つばめさん。ちょっとお借りしますね」
つばめ「え、あ、それは」

つばめ、人ごみに遮られる。
コウシャク「皆様お待たせいたしました。コウシャクの、胃薬はどっちのコーナーです」
すごい盛り上がる。

コウシャク「さぁて、ここにひとつ、胃薬を用意しました」
帝「まるで毒のような色をしているな」
ばあや「良薬は口に苦しです」
コウシャク「そして、もう一つここにあるのが、奇遇にもつばめさんが持っていた見た目が全く同じドリンクです」
ハチ「完全に一緒だ」
つばめ「みなさん。それは」
コウシャク「いまから、こちらの胃薬の方をしっかり見ていてくださいね。どちらが胃薬なのかを当てたら正解です！」
盛り上がる。
コウシャク「いきますよー」
コウシャク、面白く混乱させる。皆、混乱してくる。
コウシャク「さぁ、どっち」
帝「右だ！」
ハチ「右でしょうね」
コウシャク「お、二人共右ですね」
帝「ばあやはどっちだ？」
ばあや「えっとぉ。右（と言って左を指す）」
帝「ん、ばあや。そっちは左だぞ。どっちだ」
ばあや「え、あ、えっと、東です東！」
帝「東。東はどっちだ」
皆、混乱する。
帝「右、なのだよな？」
ハチ「右、ということで」
ばあや「み、右ですとも」
帝「つばめはどっちだ？」
つばめ「え、あ、あ」
ハチ「帝。つばめさんなら桜の花びらに聴いたら確実でしょう」
帝「そうだな。聞くまでもないな」
コウシャク「それでは皆さん。右ということでよろしいですかね。それでは正解発表です。正解は」

やや間
コウシャク、微妙な感じ。
帝「ん？　コウシャク？」
コウシャク「えっとぉ」
ハチ「コウシャクさん？」
帝「まさか、最もやってはいけないことをやってしまった感じか？」
コウシャク、とっておきの笑顔。
帝「おおぉぉぉ。コウシャク～」
ハチ「え、ではどちらかわからないんですか！」
コウシャク「すみません～」
ばあや「飲んでみたらわかるのではありませんか？」
帝「どういうことだばあや？」
ばあや「胃薬だったら、苦いはずです」
帝「なるほど。コウシャク右を貸してくれ」
コウシャク「あ、はい」
つばめ「帝様。え、ちょっとハチさん」
帝「苦かったらあたりなのだな？」
ばあや「まちがいありません」
帝「苦いのは苦いので嫌だなぁ」
ばあや「男なら一息にぐいっと」
つばめ「帝様！　待ってください！」
ハチの恋心により身動きがとれないつばめ。
帝、飲む。
間
帝「苦い！」

ばあや「あたりです！」
コウシャク「おめでとうございます。帝様」
帝「やったぁ！」
ばあや「苦いのよく飲めましたね、ぼっちゃま」
帝「もうこどもじゃないのだ」
ばあや「昔は泣いていやがっていたのに」
帝「昔は昔だ」
コウシャク「つばめさん。ありがとうございました」

コウシャク、瓶を返す。

つばめ「え、あ」

瓶をもってはけるつばめ。

コウシャク「あ、つばめさん？」

コウシャク、追う。

帝「胃薬も飲んだことだし、今日はいっぱい飲んじゃうぞ。カルーアミルクを持ってこーい」

転換

１２

ばあや「さぁ、ぼっちゃま。今日は一緒に寝ましょう」
帝「おおおぉ！　どうしたばあや急に。鳥肌がたったぞ」
ばあや「悪い予感がするんですよ」
帝「気のせいだ気のせい」
ばあや「この雷で上手く眠れなくて、睡眠不足になったらどうするんですか」
帝「ばあやと一緒じゃより寝られん！」
ばあや「昔はあんなに私の胸の中で眠っていたのに」
帝「昔は昔だ！」
ハチ「ばあ様。そう心配なさらんでも大丈夫でしょう」
ばあや「ハチ。でも悪い夢を見たのだよ。それはそれは悪い夢だったのだよう」
ハチ「夢は夢です。ばあ様」
帝「そうだ、ばあや。夢は夢だ」
ばあや「でもお。例えば、ハチが朝まで徹夜で寝室の外で警護をしてくれるというのであれば話は別ですけど」
ハチ「ん」
ばあや「でも流石に申し訳ないですもんね。ハチ？」
ハチ「ん。ん。」
帝「（視線）」
ハチ「か、構いませよ。私が警護致しましょう」
ばあや「いいのかい？」
ハチ「えぇ。任せてください」
ばあや「よろしく頼んだよ。ハチ」
ハチ「えぇ。ばあ様はごゆっくりお休みください」

ばあや、はけていく。ちょっと振り向く。はける。

ハチ「帝」
帝「帰って良いからな」
ハチ「助かります。しかし、このような天気じゃ、ばあさまのお気持ちももっともです」
帝「急に降り出したな」
ハチ「この季節にはよくあることです」
帝「私は、６時半なので寝るぞ」
ハチ「えぇ。私はコウシャクさんを待って、一緒に帰ります」
帝「そうか」
ハチ「それでは、また明日」
帝「あぁ。おやすみ」

ハチ、はけていく。

帝「全く。ばあやも困ったものだ」

帝、ろうそくを消す。

雷

帝「うー怖い」

帝「あーお腹痛い。んー。カルーアミルク飲みすぎたかな。あーお腹が痛い。痛い痛い。あ。あったっかくしないと。あ。あ」

帝、死ぬ。
薄暗い中、人影が入ってくる。つばめ。はっきりと姿は見えない。
枕元に立っているつばめ。薬の瓶を持っている。
雷。

ハチ、入ってくる。

ハチ「あれ？　コウシャクさん？　なんだ、中にいたのか」

慌てて逃げる、つばめ。

ハチ「あ、ちょっとコウシャクさん」

ハチ、影の手を掴む。

ハチ「え？」

振りほどかれる。
ハチ「帝？　帝？　大変だ！　ばあ様！　ばあ様！」
雷。
１３
１「帝が死んだらしい」
２「なんだって！」
１「なんとも毒殺されたようだ」
２「毒殺。この都も大変なことになるな」
１「それじゃあ私は、川から偶然流れてくるであろう桃を探しに行ってくる」
２「おう。気をつけて」
・・・・・・
２「大変だかあちゃん。大変だかあちゃん」
３「どうしたんだい、さぶろべえ」
２「えっとなんだっけ。あそうだムカデが撲殺されたらしい」
３「ムカデが？」
２「この都も大変なことになる」
３「そんなおっきいムカデだったのかい？」
２「あぁ、２尺３寸だ」
３「どんくらいかわからないけど、あんた見たのかい？」
２「、、みた」
・・・・・・
３「ねぇ、聞いた？」
４「なにが？」
３「なんかね、巨大な、えっとー、巨大なカレーが都で流行ってるらしいわよ」
４「えぇ！　そんなにでかいのか！」
３「そうよ。夫が見たらしいの。なんかね、２０３寸らしいわよ」
４「大体６メートル１５センチだな。それはでかい。うわっ！　なんかここまでカレーの匂いしてないか？」
３「あらホント。洗濯物がカレーの匂いになっちゃう。帰らなきゃ！」
４「気をつけてー」
・・・・・・
４「ハチさんハチさん」
ハチ「すまん、クマさん。今それどころじゃないんだ」
４「でも、えっと、なんだっけ。あ、ハレー、ハレー。ハレー彗星が来てるって都は大騒ぎだぜ」
ハチ「なに！　本当か！」
４「あぁ、３丁目の奥さんが言ってた」
ハチ「それは大変だ」
４「ちょっと今から望遠鏡買いに行ってくる」
ハチ「おう。反射させる奴のほうがいいぞ！」
・・・・・・
ばあや「ぼっちゃま。ぼっちゃま（床をゆすっている）」
クロウト「ばあ様。そちらは床です」
ハチ「ばあ様！　ばあ様！」
ばあや「どうしたのですかハチ」
クロウト「どうした！」
ハチ「都にハレー彗星が来ているようです」
ばあや「えぇ！」
クロウト「なにをバカなことを」
ばあや「ぼっちゃまが毒殺された！」
ハチ・クロウト「え？」
ばあや「本当ですかハチ！」
ハチ「あ！　そうです！　そうなのです、ばあ様！」
ばあや「ぼっちゃまあぁぁぁ！」
ハチ「ばあ様」
ばあや「大変だ。大変なことがおきてしまった」
ハチ「どうすれば」
ばあや「クロウト」
クロウト「はい」
ばあや「今すぐ皆を集めなさい！」
クロウト「はっ」
１４
ばあや「噂は風よりも早く広まっているかと思います」
つばめ「何があったのコウシャクさん」
コウシャク「私もよくわかりません。昨夜の風は相当強かったので、それ以上に速い噂となると速すぎて私の耳では追えなかったのかもしれません」
ばあや「例えです例え」
コウシャク「ああ」
つばめ「ばあ様。何があったのですか？」
ばあや「だから今からそれを言うのです。いちいち止めないでください」
つばめ「すみません」
ばあや「ぼっちゃまが、ぼっちゃまが、お隠れになりました」
つばめ・コウシャク「え？」
ハチ「ばあ様。帝はお亡くなりになられたのです」
ばあや「だから今そう言ったじゃありませんか」
ハチ「いえ。ばあ様は、今お隠れになったと」
ばあや「お隠れになる？　私がそう言いました？」
ハチ「えぇ。いま」
つばめ「ちょっと待ってください。ばあ様。どういうことですか？」
ばあや「ちょっと待ってください。今、やってますから。お隠れになるって、私、言いま

した？」
ハチ「えぇ、今」
ばあや「言ってませんよ」
ハチ「え、でも言ったじゃないですか」
ばあや「言ってませんよ。なんですかお隠れになるって。かくれんぼでもするんですか？」
ハチ「知りませんよ。私がなんですかって言ったんですから」
ばあや「あなたがお隠れになるって言ったんですか？」
ハチ「言ってませんよ！」
ばあや「じゃあ誰が言ったんです！」
ハチ「ですからばあ様が」
ばあや「だから私は言っていないって言ってるじゃない。じゃああれですか。あなたは私が悪いって言うんですか」
ハチ「別にそんなことは言ってないじゃないですか。私はただ、言葉を訂正しただけで」
ばあや「どう思いますクロウト。ハチは私が嘘をついているというのです」
ハチ「そんなこと言ってないじゃないですか」
クロウト「お亡くなりになるも、お隠れになるも、どちらも同じ意味です」

やや間

ばあや「そうですよ。ハチ」
ハチ「え、でも、今言ってないって」
ばあや「言いました。言いました。お隠れになるって言いました。みなさんも聞きましたね？」
コウシャク「えぇ、まぁ」
ハチ「コウシャクさん」
ばあや「この方が私が嘘を付いたって言って聞かないんですよ」
ハチ「そんなこと言ってないじゃないですかぁ」
ばあや「でもあなた。私が間違えたかのように喋りだしましたよね」
ハチ「それはまぁ」
ばあや「ほらそうなんじゃない。謝って」
ハチ「え」
ばあや「やだったもん。謝って」
ハチ「ばあ様」
ばあや「謝って」
ハチ「申し訳ありませんでした」
ばあや「もうそういう事やめてね」
クロウト「ばあ様」
ばあや「えぇ、わかってますよ。クロウト。私も今高ぶってますから」
クロウト「それはそうでしょうが事が事です」
ばあや「わかってますよ。みなさん。事が事です。次の帝を決めなければ都は混乱してしまいます」
つばめ「ちょっと待ってください。帝様はどうしてお亡くなりになられたのですか」
コウシャク「そ、そうです。だって昨日まであんなに」
ハチ「暗殺されたのだ。何者かにな」
つばめ「え」
コウシャク「暗殺」
ばあや「細かいことは後です。今は次の帝を決めなくてはなりません」
ハチ「どうやって決めるのですか」
ばあや「立候補です」
ハチ「立候補！」
ばあや「さぁ、誰かいますか！」
クロウト「私が」
ばあや「はいクロウト。他は？　他は？」
ハチ「え、じゃあ」
クロウト「なに？」
ばあや「はいハチ。他はいませんか。いませんね。ではふたりのどちらかが帝となります」
ハチ「投票ですか」
ばあや「いえ神に決めてもらうのです」
ハチ「神に」
ばあや「私が今からまるで棒のように倒れます。私が倒たほうが、次の帝です」
クロウト「倒れる先は、神のみぞ知るのですね」
ハチ「なるほど」
ばあや「では行きますよ」

ばあや、クロウトの方に倒れる。

ばあや「クロウト！」
クロウト「しかと受け賜りました」
ばあや「次の帝はクロウトです！」
ハチ「恣意的だ！　恣意的だ！」
ばあや「神の意志です」
ハチ「しかし」
ばあや「神聖な場です。口を慎みなさい」
ハチ「はぁ」
ばあや「それではクロウト。この都を。よろしく頼みますよ」
クロウト「は。ばあ様。皆の者。混乱しているのはよくわかる。それも全て、帝を暗殺した裏切り者のせいだ。私はばあ様のためにも、この混乱する民のためにも、裏切り者を必ず見つけ出し、火炙りにすることを誓おう。ではばあ様、これで」
ばあや「それでは、この場は解散とします！」

15

ハチ「どうしたんですか。つばめさん。今日はやけに体調が悪そうですね」
つばめ「えぇ、朝から優れなくて」
ハチ「悪い夢でも見たんじゃないですか」
つばめ「そうなのかもしれません。でも、夢は忘れるものですから」
ハチ「なんでもそうやって忘れてしまうんですか」
つばめ「え？」
ハチ「忘れてはならないものもあります。絶対に」
つばめ「、、、」

間

つばめ「すみません今日はちょっと」

ハチ「待ってください」
腕を掴むハチ。
ハチ「今日は振りほどかないんですね」
間
つばめ「ちがう（声になるかわからない）」
ハチ「あなたは、魔女だ。失礼します」
ハチ、はける。
取り残されるつばめ。
１６
クロウト、入ってくる。
クロウト「まだここにいたのか」
つばめ「、、」
クロウト「あぁ！　ふかふかだぁ。なんてふかふかなんだ。ふかふかな布団くらいふかふかだ。あぁ！　ふかふか度合いを例えるのに、同じようなもので例えてしまった！　そんなことも許せてしまうくらいふかふかだ。そうだ、フカダンスをしよう。知ってるかつばめ。フカダンスだ、フカダンス。ふっか、ふっか～。このダンスは可か不可か。不可！　いえーい！」
つばめ「クロウトさま」
クロウト「（指を振る）ちっちっちっ。ミ・カ・ド様だ」
つばめ「帝様」
クロウト「なんだ」
つばめ「あなたですか？　帝様を殺したのは」
クロウト「何を言っておる。お前が殺したんだろう？」
つばめ「私ではありません」
クロウト「でも、死んだではないか」
つばめ「ですから」
クロウト「分かっておる。お前は、殺してないんだろう？　そして私が帝を殺したんじゃないかと疑っている。このふかふかの椅子に座るために。そう。この！　ふかふかの！　椅子に座るために」
つばめ「違うのですか？」
クロウト「つばめ。人間にはいろんなタイプがいる。自分の正義を信じて歩くもの、他人に付き添って生きていくもの、膝蓋腱反射をする者しない者、ＴＨの発音ができるもの出来ないもの。そしてそんな人間達の中には、胃薬だよと言って毒を渡せば、人にのませる人間もいる」
つばめ「私は飲ませてなんかな――――え？　コウシャクさんにも渡したの？」
クロウト「ようは使いようだ。人は使いようで如何様にも輝く。所詮自分の頭で考えることのないゴミどもだ。ゴミはゴミのままではゴミでしかない。俺がうまいように使ってやるのだ。前の帝はバカだった。早起きだけが取り柄の卵にうつつを抜かしたドアホだった」
つばめ「はめたのね」
クロウト「つばめ。私は胃薬を渡しただけだ。お前もこの椅子に座ってみればわかるさ。ここが一番上だ。誰しもがここに座るために努力だのやっておるが、ここに座れるものは選ばれしものだけだ。この椅子に座ることができるのは俺だけだ。この椅子に座るものは人民を操る権利を得る」
つばめ「他人を操る権利なんて誰にもありません」
クロウト「つばめ。お前は夢を見ている。人々は、誰かに操られたいんだ。自分の頭で考えることなくただ、刻々と流れる時の川を、緩やかに緩やかに下っていたいんだ」
つばめ「夢を追ってはいけないのですか？」
クロウト「夢は現にはならないから夢なのだ。つばめ、お前にもすぐわかるさ」
１７
クロウト→３　つばめ→２
１「大変だ大変だ！」
２「そんなに慌ててどうしたの」
１「また禁止令だ」
２「えぇ！　また！」
１「今度は何が禁止されたんだ」
３「１日に１５個以上卵を食べてはいけなくなった！」
１「なんだって！」
２「あなた、コップに生卵を入れて飲み干すロッキーのモノマネができなくなってしまうわ！」
３「あのモノマネがなくなったら、娘になんのモノマネをしてやればいいんだ！」
２「唯一うけるやつなのに。唯一うけるやつなのに」
３「家族サービスを奪っていくなぁ！」
４「大変だ大変だ！」
３「今度はなんだ！」
４「ヒアルロン酸だ。ヒアルロン酸が禁止された！」
３「なんだと！」
１「それではお肌のハリがなくなってしまう！」
２「お肌のハリが！　お肌のハリが！」
１「ハリを返せ！」
５「大変だ大変だ！」
３「またか！」
５「メインイベントのことをメーンイベントって言わなきゃいけなくなった」
１「なんだそれは！」
３「なんだメーンって。剣道じゃないか！」
４「英語の発音はメインじゃない」
３「メーン！　メーン！」
６「大変だ大変だ！」
２「今度は何？」
６「今まで苦手だったニンジンが食べれるようになった！」
皆「よかったねぇ」
１「やったじゃない」
４「えらいな坊主」
６「へへ」
３「ニンジンさえ食べれたら後はなんでも食べれるもんな」
２「あなたも昔はニンジン嫌いだったもんね」

3「ちょっとこんなとこでやめてくれよ」
皆口々にほめながらはけていく。
17
ハチ「コウシャクさん」
コウシャク「どうしたんですかハチさん。苦虫にタバスコをかけて食べた時のような顔をして」
ハチ「苦虫にタバスコをかけて食べた時のような顔はしてない。悪いがコウシャクさん。洒落に付き合っている場合ではない。あんたにだけに伝えたいことがある」
コウシャク「私にだけ？」
ハチ「そうだ」
コウシャク「なんでしょう」
ハチ「帝様を殺した裏切り者についてだ」
コウシャク「ご存知なんですか？」
ハチ「あの日、偶然帝様の寝室に行き人影を見た。コウシャクさん。あんたと待ち合わせしていたあの夜だ」
コウシャク「それで」
ハチ「俺はあんただと思って、影に声をかけた。そしたら影が逃げようとした。それでとっさに腕を掴んだんだ」
コウシャク「、、」
ハチ「あの腕は、つばめだった」
コウシャク「え」
ハチ「つばめだ、帝様を殺したのはつばめだ」
コウシャク「つばめさんがそんなことをするはずありません」
ハチ「俺だってそう思いたい。でも、そうなんだ」
コウシャク「だって、何故」
ハチ「わからない。何かもっと大きな渦が渦巻いている気がするんだ。だからそれを調べる。コウシャクさん。手伝ってくれないか」
コウシャク「手伝うって、調べてどうするんですか」
ハチ「つばめを、火炙りにするさ」
コウシャク「そんなことダメです」
ハチ「あいつは帝様を殺したんだぞ。帝様を」
コウシャク「だってハチさんはつばめさんを愛しているんじゃないんですか？」
ハチ「あぁ。そんな自分に反吐が出る」
コウシャク「手伝うことはできません」
ハチ「コウシャクさん」
コウシャク「つばめさんがそんなことをするはずがない」
ハチ「でもそうなんだ」
コウシャク「もっと冷静になってください。あなたがやろうとしていることは間違っている」
ハチ「間違ってる？　あんたにも桜の花びらでも降ってきてるっていうのか」
コウシャク「いえ、そういうわけでは」
ハチ「必ず。みつけだしてやる」
18
1「よう魔女さん」
つばめ「魔女？」
1「おう。そうだろ。都じゃあんたが帝を殺したって評判だぜ？」
つばめ「なんでそんなこと」
1「まぁ、俺はあんたが帝を殺してようが殺していまいがどうでもいいのよ」
つばめ「どうでもよくありません」
1「どうでもいいのさ。文字さえ書いてくれればな」
つばめ「文字」
1「なんか書いてくれよ」
つばめ「嫌です」
1「嫌とかじゃねえよ。書くんだよ！」
「腕」と書く。
1「そうだよ。わかってんじゃねぇか。ん。あれ、あ、あ、あ、あ、腕が、腕が制御できねえ！　このアクロバティックな腕の動きを制御できねぇ！」
つばめ「え」
1「魔女だ！　お前はやっぱり魔女だ！」
つばめ「私は魔女なんかじゃない。あ、便秘の奥さんこんにちは」
2「あたしの旦那に「力」って書いたのはあんたかい！」
つばめ「はい」
2「力を求めるあまり、良質なたんぱく質を取ろうと生卵を毎日１００個食べて捕まっちまたじゃないかい！」
つばめ「それは」
2「なんてことをしてくれたの！」
3「魔女の力を見せてくれよ」
つばめ「私は魔女なんかじゃない」
3「そんなことはなんでもいいのよ。ほら」
つばめ、「丸」と書く。
3「あぁ！　大変だ！　ただでさえ２４点の答案用紙から丸がどんどんなくなっていく！」
つばめ「点数は変わらないじゃない！」
3「なんてことをしてくれたんだ。やっぱりあんたは魔女だ！　というか鬼だ！」
1「鬼だ！」
2「鬼だ！」
1・2・3「鬼だ！」
コウシャク、ＩＮ。
コウシャク「何をしているんですか！」
1「魔女の仲間が来たぞ」
2「坊や。見ちゃいけません」
逃げていく、人々。

コウシャク「大丈夫ですかつばめさん」
つばめ「、、」

つばめ、はける。

コウシャク「どこ行くんですか！」

コウシャク、はける。

１９

ハチ、何かを探している。

ハチ「何か、何か証拠があれば」

「帝」の漢字をみつける。

ハチ「なんだこれは。消えかかっている。帝？　つばめの字だ。まさか。クロウトとつながっていたのか」

コウシャクとつばめ。

コウシャク「なにをしているんですか！」
つばめ「離してコウシャクさん。聴こえなきゃいいのよ。聴こえなきゃ、誰も悲しい思いをしなくてよかったのに」
コウシャク「悲しみも喜びも一時のものです。一時の感情に支配されてはいけません」
つばめ「皆私のことを魔女だというわ。誰も私のことを見ていない。みんなが見ているのは私の文字だけ。自分の欲望だけなのよ」
コウシャク「あなたは魔女じゃないじゃないですか」
つばめ「一人ぼっち。こんな広い世界の中で私は一人ぼっちなの」
コウシャク「そんなことない」
つばめ「何がわかるの。ただ、のほほんと生きているだけのあなたに何がわかるの？」
コウシャク「わからないです。何もわからないですけど」
つばめ「あなたのせいで。あなたが毒を飲ませなければこんなことにはならなかったんじゃない！」
コウシャク「私は毒なんて飲ませてません」
つばめ「飲ませたじゃない（文字を荒らす）」
コウシャク「何のことですか？」
つばめ「クロウトから胃薬をもらったでしょう」
コウシャク「もらいましたが」
つばめ「それが毒だったのよ！」
コウシャク「え？」
つばめ「私たちは毒を渡されたの」
コウシャク「え、だって、そんな」
つばめ「それをあなたが、コウシャクの胃薬はどっちのコーナーで飲ませたんじゃない」
コウシャク「え、」
つばめ「、、ごめんなさい」

つばめ、はける。
ハチ、やって来る。

ハチ「コウシャクさん。コウシャクさん。やっぱりそうだ。つばめが帝を殺したんだ」
コウシャウ「違う。ハチさん」
ハチ「つばめはクロウトと繋がっている」
コウシャク「違うんですハチさん。私が、私が殺したんです」
ハチ「何を言ってるんだコウシャクさん。そんなわけないだろう」
コウシャク「でも」
ハチ「クロウトの部屋につばめの書いた文字があった」
コウシャク「つばめさんの？」
ハチ「かすれてはいたがそこには「帝」と書かれていた」
コウシャク「帝？」
ハチ「そうだ。桜の花びらは夢を現にする。クロウトの野望を叶えるためにつばめが帝を殺したんだ」
コウシャク「違うんですよハチさん。私が帝様を殺したんです」
ハチ「さっきから何を言ってるんだあんたは」
コウシャク「私が飲ませた胃薬が毒だったんですよ」
ハチ「妄言もいい加減にしろコウシャクさん。じゃあ何故、あの日、あの時、あいつは帝の部屋に居たんだ」
コウシャク「それは」
ハチ「そうなんだよ、コウシャクさん。そうなんだ。あんたも夢を追いすぎだ」

クロウト、やって来る。

クロウト「なんだか、騒がしいのう」
ハチ「クロウト」
クロウト「ボブ・ディランがうたっているのかと思ったぞ」
ハチ「失礼しましたクロウト様。コウシャクさんと犬か猫、どちらがかわいいかで対立してしまいました」
クロウト「そんなもの猫に決まっておるだろう」
ハチ「そうでしょうか。私は犬だと思うのですが」
クロウト「何を言っている。高貴さが違う」
コウシャク「クロウトさん」
クロウト「なんだ」
コウシャク「あの胃薬は、毒だったのですか？」
クロウト「（笑う）何を言っておるコウシャク。私はお前に胃薬を渡したんだ。そうだろう、コウシャク。私はお前に胃薬を渡したろう？」
コウシャク「そうですが、、」
ハチ「クロウト様。高貴さといえば犬もワンと鳴きます。一番です」
クロウト「ワンで一番なのはホームラン王だけだ。ニャーの鳴き声の麗しさときたら」
ハチ「ワンも力強いですぞ」
クロウト「ニャーだ」
ハチ「ワンです」
クロウト「ニャー」
ハチ「ワン」
クロウト「ニャー！」

ハチ「ワン！」
何度か言い合う。
コウシャク「パオーン！」
１９
サウナ。
１「扉！」
２「え？」
３「サウナの温度下がっちゃうから」
２「あ、すみません」
４「あぁ～」
１「くぅ～」
２「何分ですか？」
１「もう５５分」
２「５５分！」
３「トキちゃんなんてもう３日目よ」
４「あぁ～」
１「もうね、ミイラよミイラ」
３「生きる屍とはこのことだ」
２「皮膚もこの世のものとは思えないくらいシワシワですね」
１「この刻々と刻まれた谷に、何百・何千ものダニが住んでいる」
３「兄ちゃん。俺らもこのダニと一緒よ」
１「どういうことだ」
４「あちぃ～」
３「このサウナという環境の中で、汗という洪水にのまれていく」
１「なるほど」
４「あちぃ～」
１、限界が来る。
３「兄ちゃん。まさか辞めるんじゃあねえだろうな」
１「まさか。俺はただ立っただけだよ」
３「紛らわしいことをするんじゃねぇよ。座れ」
１「立つか座るか俺の勝手だろう」
３「お前がこのままやめちゃうんじゃねえかって紛らわしいって言ってるんだよ」
１「あぁ、じゃあ座ればいいんだろ、座れば」
３「あぁ、それでいい」
４「あぁ～」
２「暑いっすねぇ」
３「あぁ」
１「いや、そこまでだけどね」
３「俺もそう思ってたところだ」
２「え、でも今暑いって」
３「捉え方の問題だ。一般的には熱いけど、俺は熱くねえ」
１「本当に暑くねぇのかい？」
３「あぁ」
４「あぁ～」
１「じゃあ、ロウリュやっても大丈夫よなぁ」
３「あぁ、むしろやりたい。今ちょうどやりたいと思っていた」
２「ロウリュって何ですか？」
１「ロウリュってのはね、フィンランドに伝わるサウナ風呂の入浴法の一つでな、熱したサウナストーンに水をかけて水蒸気を発生させることで、体感温度を上げて発汗作用を促進するやつよ」
２「より熱くなるんですね」
３「ぬるいくらいだったからちょうどいい」
１「じゃあ、行くぜ」
１、ロウリュする。
３「あぁ～」
２「くぅ～」
４「あぁ～」
２「苦しぃ」
３「なんでこんなに苦しいんだ」
１「クロウトのせいじゃねぇのか？」
３「魔女のせいだ」
１「暴動だ」
２・３「暴動だ」
・・・・・・
兵士１「クロウト様」
クロウト「どうした」
兵士１「暴動です。人々が暴動を始めました」
クロウト・ハチ「なに！」
兵士１「魔女を出せと騒いでおります」
クロウト「魔女？」
コウシャク「つばめさんのことだ」
クロウト「つばめをよんで来い！」
・・・・・・
１「武器は持ったか！」
２「持ってないぞ」
３「モップでいい！」
２「モップでいいのか！」
１・３「いい」
５・６、通り過ぎる。

5「あら、クマさん。モップなんて持ってどこ行くの」
2「暴動。暴動」
6「まぁやだ。またボートなんか行っちゃって。奥さんに怒られるんじゃないの？」
2「違う違う。俺たちが暴徒になるんだ！」
1「お岩さんたちはどこに行くんだ」
5「私たちは百貨店よ百貨店」
6「ほら？　私たちモガじゃない？」
3「そういわれてみたらコーヒーみたいな匂いする」
6「それはモカよモカ。私が言ってるのはモガ」
2「なんだいモガって」
5・6「モダンガール」

1・2・3、笑う。

2「モダンガールってあんたらがかい？」
3「モーガンフリーマンの間違いじゃないのか？」
5「あぁやだ、あなたたちモダンのこと何にも知らないのね」
1「知らない知らない。ロダンなら知ってるけどな」
3「考える人。考える人」
6「一生うんこ踏ん張ってなさいよ！」
3「なんなんだよモダンって」
5「モダンはね、お好み焼きに焼きそばをいれるのよ」

やや間

1「お好み焼きに焼きそばを」
3「まじかよ」
2「一度で二度おいしいじゃねぇか」
3「本当かいお岩さん」
5「えぇ、本当よ」
2「それは革命だな」
1「そうだ革命だ！」
皆「革命だ！」

・・・・・・

宮殿

クロウト「つばめ。お前の力で暴動を鎮めるんだ」
つばめ「私にそんな力はありません」
クロウト「お前が文字を書いたら鎮まるだろう！」
つばめ「違います。桜の花びらが私に教えてくれるだけです。私にはそんな力はありません！」
クロウト「えぇい。構わん。書け！」

クロウト、無理やりつばめに文字を書かせる。「鎮」。

つばめ「やめてください。こんなことをしても意味ないわ」
コウシャク「クロウトさん。やめてください」
クロウト「止めろとめるんだ。そうだ、お前の文字はすべて正しい」
ハチ「クロウト様」
クロウト「どうした」
ハチ「暴動がより激しくなっております」
クロウト「何故、止まらんのだ」

・・・・・・

1「巨大な門だ」
2「壊せ壊せ！」
3「どうやって壊す」
1「丸太だ！　丸太でドンってやるんだ！」
2「丸太なんてどこにあるんだ！」
4「ちょうど持ってるぜ」
1「トキさん！」
2「さすがだぜ」
3「行くぞ。せーの」

丸太をぶつける。

1「もういっちょ！　せーの」

門が壊れる。

・・・・・・

皆、吹き飛ばされる。

兵士1「クロウト様！　門が押し破られました！」
クロウト「まだ一度も破られたことのない門だぞ」
ハチ「クロウト様。もうここは危険です。こちらに」
クロウト「あぁ」
ハチ「どうされましたか」
クロウト「まて。ふかふかの椅子を持っていく」
ハチ「そんなことを言っている場合ではありません」
クロウト「だが」
ハチ「一刻を争います！」
クロウト「どこへ行く。つばめ！」

つばめ、逃げる。

コウシャク「つばめさん！」

追っていくコウシャク。

・・・・・・・

１「魔女はどこだ」
３「魔女は魔女でも食べられない魔女はなーんだ！」
２「それは魔女だ！」
１「いたぞ魔女が！」
コウシャク「つばめさん。こっちです」
２「魔女が逃げたぞ！」
１「追え！」
３「捕まえて火あぶりにするんだ！」
２「あっちだ！」
１「牢屋に入れろ！」
３「牢屋に入れろ！」
２「火炙りだ！」
つばめ「やめて！」
コウシャク「やめてください！　つばめさんは魔女なんかじゃありません！」
１「お前、魔女の肩を持つつもりか」
２「魔女の肩にはパットでも入っているのか！」
３「カタパルトだカタパルト」
コウシャク「何を言っているんですか！」
１「お前やっぱり、俺たちをカタパルトするつもりだな」
つばめ「そんな。カタパルトだなんて」
２「硬パスタはもうパスタではない！」
３「そうだ！　硬いパスタはパスタじゃない！」
１「アルデンテをするな！」
３「捕まえろ！」
１「魔女なんてアルデンテだ！」
２「火あぶりだ！」
コウシャク「つばめさん！」

捕まる、つばめ。以降、喋っている。
ガッシャン。

・・・・・・・

ばあや「こんな時のための隠し通路です」
クロウト「こんなところがあったのか」
ハチ「さぁ、クロウト様。急いで！」
クロウト「しかし、都はどうなる」
ハチ「今はこの暴動から逃れるのが先決です」

・・・・・・・

コウシャク「つばめさんを返してください！」
１「うるさい！　魔女が俺たちを苦しめたんだ！」
コウシャク「あなたたちはつばめさんを聖女だと言っていたじゃないですか！」
３「俺たちがいつまでも昨日の俺と同じだと思うなよ！」
２「人間は成長するんだ」
１「そうだ、脱皮するんだ！」
３「帝を殺した魔女は火あぶりだ！」
２「あの魔女が帝を殺したせいで、俺たちの生活は苦しくなってしまった！」
３「クロウトを探せ！」
２「クロウトはどこだ！」
コウシャク「帝を殺したのは私です！　つばめさんじゃありません！」
１「うるさい黙れ！」
２「嘘をつくのはやめろ！」
コウシャク「嘘じゃありません！　どうして信じてくれないのです！」
１「嘘に決まってる」
３「本当に殺した奴は、自分で殺したなんて言わねえよ！」
２「そうだそうだ」
コウシャク「どうしたら信じてもらえるんですか」

コウシャク、パンを盗む。

１「あ、おめえ俺のアンパンを。なにしやがる！」
コウシャク「パンを盗みました！　パンを盗みました！」
２「返しやがれ！」
１「かわいそうだろ！　あんなに楽しみにしてたのに！」
３「泥棒は良くないぞ！」

コウシャク、食べる。

コウシャク「食べました！　食べましたよ！　私は、アンパンを食べましたよ！」
２「気が狂いやがった！」
コウシャク「これで私も犯罪者です。そうでしょう、みなさん。私もこれで！　犯罪者でしょう！」
３「狂人だ！」
皆「牢屋にぶち込め！」
１「パンをかえせぇ！」

ガシャン
無音
２０
間

コウシャク「つばめさん」
つばめ「コウシャクさん」
コウシャク「パンを盗みました。パンでなくても良かったんですが、そこにあったものですから」
つばめ「、、」
コウシャク「一人じゃ、寂しいでしょう？」

間

コウシャク「都は大変なことになっています」
つばめ「えぇ。初めて都に来たときは輝いて見えた。まるで夢の中にいるかのようだった。でも、もう、壁についた汚れが、道に落ちているゴミが見えてしまうわ」
コウシャク「理想と現実は違います。現実を知らないと、人は理想を見てしまいます」
つばめ「都はもっと自由なところだと思ってた」
コウシャク「違いましたか？」
つばめ「んーん。どこも一緒。みんな一緒。人間は自由を与えられた生き物なのに、自分で考えることが出来る生き物なのに、みんな一緒なの。雨が降れば傘をさすし、朝にはみんながみんな同じ方向に歩くの。誰も天の声に耳を傾けようとしないわ。本当は誰にでもできるのに、あきらめて、捨てて、見えないようにして、嘘をついて生きている」
コウシャク「嘘をつくのは悪いことですか？」
つばめ「違うの？」
コウシャク「自分に嘘をつかないと崩れていってしまいますよ。人間にはいろんな種類の人間がいます。私が思ってもみなかったことをして。思ってもみないように生きて。別々の方向に歩いているのです。でも、本当は、大きなところではみんな同じ方向を向いて歩いているのです。だから、また、どこかで出会う時がきっと、訪れます。「天」という字は「二人」と書きます。二人なら、天まで手が届くような気がします。二人なら、天の声を聴くことが出来るような気がします。二人なら。きっと」

21
ハチ「クロウト様。こちらです」

ハチ、クロウトを刺す。

クロウト「うっ」
ハチ「ダメじゃないですか。敵に背中を向けちゃ」
クロウト「ハチ」
ハチ「このまま生きて出られるとでも思ったんですか？　帝を殺したアンタらが、このままのこのこと都を出れるとでも思ったんですか？」
クロウト「(嗚咽)」
ハチ「その顔が見たかった。顔は青ざめ、目は据わり、恐怖に身をゆだねて呆然と、この不気味な天の怒りを眺める以外に能がなくなった、そんなあんたが見たかった」
クロウト「この暴動もお前が」
ハチ「簡単なことです。人にはいろんなタイプがいますからね。一人じゃ何もできなくても、大人数集まったら何でもできるような気がしてしまうような人間もたくさんいるのです。粉塵爆発と一緒です。ただの粉でも、それが舞えば、少しの火種で爆発するのです」
クロウト「こんなことをして、何が変わる」
ハチ「変えようなんてこれっぽっちも思ってません。これっぽっちも」
クロウト「つばめは」
ハチ「火あぶりにしますよ。あなたはここで、誰にも見つかることもなくゆっくりと死んでいけばいい」

22
コウシャク「少し。昔話をしてもいいですか？」

つばめ「、、、」
コウシャク「あるところに、少し頭の弱い男がいました。そうですね。仮にゴンザレスとでもしておきます。ゴンザレスは持病の療養のために田舎で暮らすことになりました。田舎はなんにもなくて。都よりずっと空が高くて、どこまでもどこまでも小麦畑が続いていました。春になるとその小麦畑の中心に桜が咲くのです」
つばめ「、、、」
コウシャク「その樹の下でのんびりとすると、風が小麦を奏で、虫は歌い、鳥が指揮をします。世界は音楽で溢れています。川が囁き、動物たちが笑い、空が私たちを包み込んでくれます。そこで、ゴンザレスはひとりの少女にあったのです」
つばめ「、、、」
コウシャク「その少女は村のはずれに住んでおり、ひとりの老婆とふたりの兄と暮らしていました。ふたりの兄は鉄を叩いてお金を稼いでいましたが、それでも暮らしは大変でした。そこでゴンザレスは、その少女に自分の持っていた宝石を渡しました。可哀想とか、哀れみとかではなく、ただ、何となく、何となくその少女の喜ぶ顔が見たくて、キラキラと光る石をあげたのです」
つばめ「、、、」
コウシャク「ゴンザレスは、ただ、少女の喜ぶ顔が見たかったのです」

やや間

つばめ「それからどうしたの？」
コウシャク「その少女はとても喜びました。ゴンザレスはとてもとても幸せでした」
つばめ「おしまい？」
コウシャク「、、、」
つばめ「そのお話にはね、続きがあるの」
コウシャク「続き？」
つばめ「そう。その日から何年も経って、少女は、そうね、名前はブキャナンにしましょう。ブキャナンはそのキラキラ光る石を持って、都に出ることにするの。石を渡してくれた男の人を探しにいこうと思ったのよ」
コウシャク「え？」
つばめ「桜の雪がその男の人を探せって言ったのよ」
コウシャク「それで、見つかったのですか？」
つばめ「ええ。すぐに見つかったわ。でもブキャナンはだまってたの」
コウシャク「どうして？」
つばめ「、、、どうしてだろう。シャイだったんじゃない？」
コウシャク「、、、ゴンザレスもです」
つばめ「ずっと。このままでもいいのかなって思ってた。本当かどうかはわからないけど、でも、それは本当で、嘘でもあって、そのままずっと、ずっと嘘で有り続けるの。そのままずっと」
コウシャク「嘘をひっくり返して本当にした時に、その嘘の中にあった本当がどっかに行ってしまうような気がして臆病になってしまいます」
つばめ「でも、嘘は嘘のままじゃダメなのかしら？」
コウシャク「そうでしょうか」
つばめ「ちがう？」
コウシャク「さぁ、どうでしょう？」

間

つばめ「コウシャクさん」
コウシャク「はい」
つばめ「ここを出たら一緒に桜を見に行きましょ？」
コウシャク「はい」
つばめ「きっと満開に花を咲かせているでしょうね」
コウシャク「はい」
つばめ「春になると小麦畑に桜の雪が降るの」
コウシャク「はい」
つばめ「雪は溶けることなく降り積もり、世界に色を与えるの」
コウシャク「はい」

ハチ、入ってくる。

ハチ「つばめ。来なさい」

つばめ、ついていく。

コウシャク、「はい」と言い続ける。叫ぶ。

２３

ハチ・つばめ

つばめ「ハチさん。覚えていますか。私と出会った日のことを」
ハチ「、、」
つばめ「私が「卵」って書いたら、ハチさんも帝様も、まるで子供みたいにはしゃぎまわって」
ハチ「、、」

・・・・・・・

牢獄。
嗚咽しているコウシャク。
クロウトがくる。

クロウト「つばめは」
コウシャク「、、」
クロウト「そうか（嗚咽）」
コウシャク「クロウトさん。血が。血が」
クロウト「酔っぱらいの悪ふざけだ。酔っぱらうと、皮膚の感覚がなくなって、自分がまるで大きくなってしまったかのような気分になる」
コウシャク「今人を」
クロウト「コウシャク。自分の好きなところへ行け。誰もそれを妨げることなど出来ない。私も私の好きなようにする。コウシャク。私はただ酔いを醒ますためだけにここに来たのだ」

コウシャク、ハケル。

クロウト「酔いを醒ますには、ちょっとだけ寒いところで寝るのが一番だ。火照った身体を冷たいところに押し付けて、ゆっくりとゆっくりと息を吐く。息は白くなり、天へと昇っていく。私の中の何かが、ゆっくりとゆっくりと天に昇っていくのだ。まだ、私にもこんなに美しい煙が残っていたんだな」

おい。帝。夜明けまでどのくらいあるのだ。星の動きを見ていても分らんぞ。おい帝。聞いているのか。俺もそう馬鹿になりたいものだ。

２４
処刑。

１「ハチ様。準備が整いました」
ハチ「つばめ。のぼれ」

つばめ、のぼる。

つばめ「一歩を踏み出すのがこんなに怖いことだったなんて、桜の花びらは教えてくれなかったわ。こうやって、私はこうやって一歩一歩、かぐや姫のように月へと昇っていくのね。天の羽衣は、この世の穢れを忘れさせるというけれど、この聖なる炎は私から木々を渡る風の音を、日の光の中でさえずるひばりの声を、凍てつく空気を通して鳴く子羊の唄を忘れさせるのね。でもコウシャクさん。あなたはきっと、天の羽衣で着飾った私を見て、微笑んでくれるでしょうね。仏の御石の鉢（ほとけのみいしのはち）も、燕の子安貝（つばめのこやすがい）も、火ネズミの皮衣（ひねずみのかわごろも）も、蓬莱の玉の枝（ほうらいのたまのえだ）も、龍の頸玉（りゅうのくびのたま）もいりません。ただ、コウシャクさん。あなたと、ただあなたと一緒にいたい」
コウシャク「ロシナンテ。私を世界の果てまで連れて行ってください！　つばめさんがいるあの世界の果てへ！　何もかも見えなくなるまで、どんどんどんどん走ってください。さぁ、もっと遠くへ駈けるんだ！　空が天高く舞い上がり、遠くの方で星がキラキラ光っている。森が黒い化物となって襲い掛かり、月が私と併走する。足元には銀鼠の霧がたなびき、霧の中から琴の音色が響いてくる。片方には夢が広がり、もう片方には現が広がる。この目に移る、燃え盛る都は夢なのか。現なのか。走ってください ロシナンテ。あなたは名馬です。巨人とも戦いました。竜とも戦いました。あなたは数多の戦士を私と共に打ち負かした駿馬です。必ず間に合います。必ず間に合いますよ、つばめさん。もう少し待ってください。もう少しを繰り返していけば、どんなところへもたどり着けるんです。どんなところへも。もう少しだけでいいんです。もう少しだけで。もう少しだけで、もう少しだけでいいので、そこで待っていてください」
兵士「ハチ様。こちらに向かって、何者かが向かってきています」
ハチ「構わん撃て！」
兵士「しかし」
ハチ「構わん！　射撃用意！」
コウシャク「さぁ、もう少しですよ、ロシナンテ。最終コーナーを回りました。残りは直線だけです。月から頭一つ突き出ましたよロシナンテ。もう少し頑張ってください。つばめさん。あなたと会った時からずっと思っていたことがあります。昔とある田舎であった時も。この都で再会した時も。ずっと。ずっと言いたかったことがあります。だから、もう一度、もう一度だけ、笑ってください」

つばめ「木に嬰（あかご）と書いて、櫻になります。人は櫻として生まれ、生き、桜の雪となって散っていきます。桜の雪は溶けることなく大地に降り積もり、大地を乙女色に染め上げるでしょう。私たちはその乙女色の大地の上をゆっくりとゆっくりと歩くのです。決して急ぐことなく、かと言って立ち止まることもなく。ゆっくりと、ただゆっくりと歩き続けます。足元の桜の花びらはそんな私たちにずっとずっと囁きかけているのです。聴こえませんか？　コウシャクさん。聴こえませんか？　桜の雪の囁きが。まだ聴こえないというのなら、それでも聴こえないというのなら、私が代わりに囁きましょう。コウシャクさん！」

コウシャク「つばめさん！」

ハチ「撃てえ！」

乾いた発砲音。

二人の声はかき消される。

音楽。

スローモーション。

撃たれるコウシャク。燃え上がる炎。焼き尽くされていくつばめ。天の羽衣まとったつばめは、ゆっくりとゆっくりと、コウシャクに向かってくる。その姿は月の軍を引き連れた女神の様。天の羽衣は、ゆっくりとコウシャクも包んでいく。

溶暗。

２５

エピローグ。

舞台には何もない。

コウシャク、山を登っている。

山頂に着く。

桜が咲いている。

コウシャク「あ、桜の雪が、降ってきましたよ」

溶暗。

（完）